

吉田健介さんの思い出

2009年7月5日

江口 徹(京都大学)

吉田さんとお会いするようになったのは20年近く前のことだったと思います。

初めの頃は吉田さんはまだサレルノにおられたと思いますが、トリエステやコモ湖の学会などで何度かお会いして知り合いになりました。しばらくすると吉田さんはローマ大学に移られ、毎年一度、一ヶ月ほど授業のない時期に日本にこられて東大本郷の我々のグループに滞在されるようになりました。吉田さんが東大にいらっしゃる間は毎日のように山上会館で一緒に昼食をとりました。

ヨーロッパで長く暮された吉田さんからはイタリアやヨーロッパの物理学者の噂話や、イタリアでの生活、年金、政治情勢など、他の人からは聞けないようないろいろな話を伺い楽しい時間を過ごしました。カビボ、マイア二、ヨナ・ラシニオなど著名なローマ大学の同僚教授の話もよく出てきました。また、イタリアの政治の話もよく話題になりましたが、吉田さんは右派のベルルスコーニなどは嫌っておられたようで、政治家が汚職の訴追を免れることを可能にする法案などには強い批判を持っておられました。ローマ在住の作家、塩野七生さんの著書が話題になったこともあります。吉田さんが蝶の写真でよく知られていることは伺っていましたが、僕が米国のアспенから持ち帰った動物の写真を東大の研究室に貼っていたところ大変興味を示されたことがあります。

吉田さんの学生時代の話になると、飯高さんと新谷さんの名前が上がるのが常でした。著名な数学者を同級生に持たれたことが吉田さんの自慢の一つだったように思います。

ここ数年ほどは本郷に来られると東京の病院でガンの治療を受けておられると伺っていましたが、それ程深刻な状況という印象ではなく、念のためにチェックをしているといった感じに受け取っていました。一昨年くらいになると少し痩せられたように見えてましたが、大変にお元気でもう完全に治りましたと言っておられました。2007年の12月に大阪市大で研究会があった時にお会いしましたが、この時は奥さんとご一緒に旅行を楽しんでおられました。

2008年の春ごろになって病状が急変され、夏に亡くなられたことを伺ったときには突然で大変に驚きました。3月ころにイタリアでチェックをしたときには異常が見つからなかったそうですが何か検査に手落ちがあったのでは無いでしょうか？もう少し転移が早く見つかっていれば何か有効な手立てもあったのではないかと大変残念に思います。昨年の暮れにストックホルムのノーベル賞受賞式に参加する機会があり、この時に吉田さんの同僚のヨナ・ラシニオ氏にお会いしましたが、吉田は良い人だったのに亡くなられたこと

は大変残念だった。自分も吉田はすっかり良くなったものと思っていた。何か医療にミスがあったのかと思うと言われておられました。

お通夜の席でもうかがいましたが、吉田さんが駒場から英国に留学された理由が最後まで誰にも分からなかったということです。立派な家系のご出身であることからくる影響や、お父様のおられた英国への憧れといったものがあったのでしょうか？しかし吉田さんは自分で選んだ道を最後までしっかりと歩まれ多くの者に強い感銘を残しました。最近、吉田さんの最後の学生からイタリアの研究会で吉田さんが追悼された様子をうかがいました。心からご冥福をお祈りいたします。

京都大学 江口 徹